

京ことばと船場ことば

角 岡 賢 一

▶ キーワード

京ことば、船場ことば、
動態保存、京阪方言

▼ 要 旨

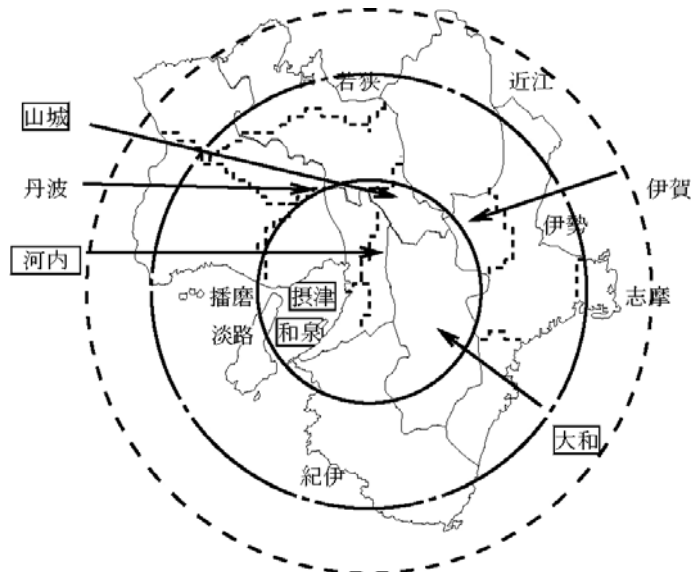
This is a contrastive study of *Kyo-kotoba* (Kyoto dialect) and *Semba-kotoba* (Semba dialect), which are considered to be the core of the Kinki district. Kyoto had been the capital of Japan for 1100 years until the Meiji Restoration, and Semba has long been the center of commerce. Geographically, politically and economically, Kyo-kotoba and Semba-kotoba are the most prestigious among the Kinki dialects. In this paper, pragmatic aspects will be explored in the greetings and commercial conversations, as well as from the phonological and lexicological viewpoints.

第一節 はじめに

本稿では、上方ことばの代表的な下位区分として京ことばと船場ことばを比較対照する。まずは用語としての方言区画から論じる必要がある。方言学上は、近畿地方で話されるのは「近畿方言」として括るのが一般的であろう。『関西弁事典』でも、巻頭の編集方針でそのように言及されている。その際に留意せねばならないのが、行政上の区画と方言学的な区画が一致しないという点である。方言学上の近畿方言には若狭方言が含まれる一方で、但馬と丹波は中国方言的な色彩が強いと指摘されている（同事典）。このように、方言区画を示すには現行の府県境よりも旧国名で表示した方が実情を反映して好ましいのである。廃藩置県から僅々百六十年ほど、その間に近代化の波が押し寄せて社会全体が大きく変化したとしても、方言区画に残る言語基盤は保たれている部分が大いと言えそうである。

また同事典では、書名からして「関西弁」と標榜しているが、「～弁」というのは方言学的ではなく一般的な通称という印象を受ける。例えば「大阪弁」と言えば大阪府下全域を指し、摂津だけではなしに泉州方言や河内方言も含まれて区別ができない。これは甚だ不都合である。

先に「上方ことば」と称したが、以下の論考ではこれは若狭を含み、但馬と丹後を除く近畿方言と同一の定義とする。旧国名では、山城、摂津、大和、河内、和泉、近江、丹波、播磨、淡路、紀伊、伊勢、志摩、伊賀、そして若狭という十四箇国である。摂津と山城を中心として、同心円状に広がっている。方言区画としては、旧国名で表示するのが簡便である。無論、もっと細分化すれば細かい区別をすることができる。これを地図で示してみよう。畿内五箇国は囲みで表示する。旧国境は点線で表示してあるが、現行の府県境を跨いでいるのは、摂津、丹波、紀伊である。



〈旧国名による畿内と周辺諸国〉

近畿地方という名称そのものが、大和朝廷が都を据えて以来、畿内を中心として政治経済の中心であったという事情を物語っている。言語的にも、畿内で話されていた話し言葉が標準的であり、周辺の諸方言とは比較的明確な線が引かれているように思われる。この五箇国と隣接しているのは播磨、丹波、近江、伊賀、伊勢、紀伊、淡路である。境を接していないのは志摩と若狭のみで、但馬と丹後は方言区画としては近畿方言圏外である。三重の同心円を描いてみると、中心は河内と摂津と和泉という三国が境を接する大和川の近辺に位置する。

畿内外縁部では、方言圏論の好例とも言えそうな音声－音韻現象が見られる。ザ行－ダ行－ラ行の混交で、播磨、丹波、紀伊においてである。座布団が「だぶとん」、前栽が「せんだい」、「角の饅頭屋」が「かろのうろんや」になる。『関西弁事典』では「「かろのうろんや」はどこへ行った」という特設欄を設けて、ダ行－ラ行混交を採り上げている。そこでは、このような混交は嘗て近畿方言で広く見られていたが、一九八〇年代では大和、紀伊と近畿地方北部に限られるようになっていたと報告されている。当該地でも、若い世代は漢字で書いた通りに発音しているであろう。まだ混交を保っている世代から交替が進めば、日常生活では耳にすることが無くなるのであろう。同事典の図十では、ザ行－ダ行の混交は播磨、丹波、紀伊に加えて大和の中南部と丹後にも分布すると示されている。紀伊は現在の県境までで、県境を越えた

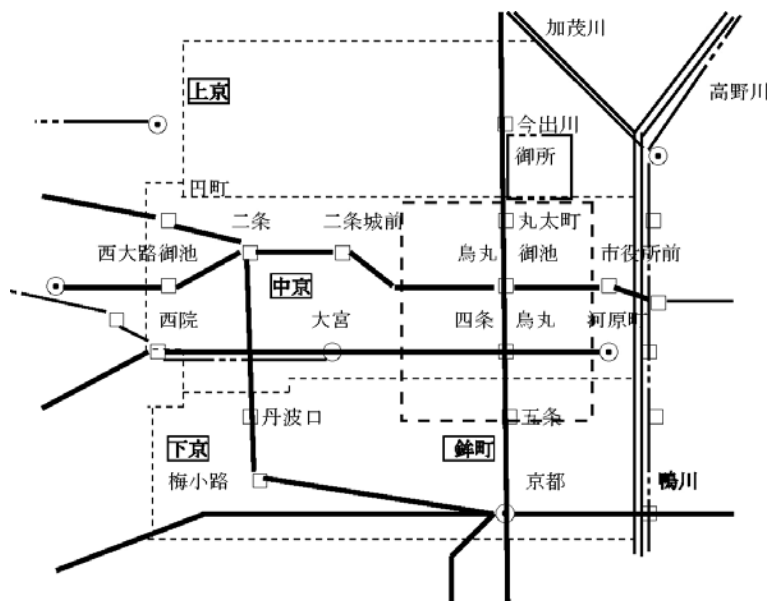
北紀には見られない。

今でこそ京阪神と三都で括っているが、神戸は幕末の開港までは小さな港町でしかなかった。兵庫の津から天保山までは渡し船があったようで、噺『兵庫の渡海、鱈の魅入れ』に題材が採られている。廃藩置県で、兵庫という地名が県名に採用されたのも、以前に指摘したが腑に落ちない。兵庫県は、但馬、播磨、淡路に摂津と丹波の半分ずつという五国で構成されているが、県名として兵庫が採用されたのは、どのような事情からであろうか。神戸という地名は、上方噺では出てこない。その神戸の一部である兵庫の津は、天保山までの渡しに名を残している。開港に伴い、外国人居留地も設けられて、瞬く間に人口も増えたことであろう。

神戸方言は、摂津の西半分を占めているものの、船場ことばとは異なる特徴がある。最も頻繁に指摘されるのは、「～シテイル」という相が「～シトウ」になる現象であろう。「知ッテイルカ」は船場ことばでは「知っとるか」であるが、神戸ことばでは「知っとうか」となる。これは播磨でも共通で、これを聞くだけで神戸以西の方言であることが明らかになる。摂津の東半分に接する西宮や伊丹、尼崎では耳にすることがないように思われる。このように見ていくと、摂津の下位区分として大阪市内－阪神間－神戸市域という細分化する必要もあり得る。

第二節 洛中の地理

本稿では、京ことばとは行政区画で旧上京と下京（昭和四年に中京区が分区されて三区となった）で話されている言葉を指すものとする。以下、この三区を「洛中」と括る。洛中の東境は鴨川である。京阪電車の出町柳駅付近で加茂川と高野川が合流して鴨川となる。上京区は北が鞍馬口、南は御池通、西は北野天満宮の西側を流れる川が区境となっている。中京区の西は三条以北が西小路、松原通までは西大路、大宮通から東は四条が南境である。二条城と市役所、花街では先斗町が区内である。下京区の南端は東海道線、西は西佐井通である。東海道線と近鉄、地下鉄という鉄道の玄関口も下京区内である。洛中全体で南北は一里二十町、東西は一里ほどで面積は一九四四町歩ほどである。この洛中三区を単純化して地図にしてみよう。山田庄一氏『京なにわ暮らし歳時記』で謂う鉾町を太い点線で示してある。



〈洛中図〉

中京に路線と駅が集中している実態が見て取れる。五線の十一駅がある。四条通は阪急線と嵐電が重複する区間を含めて密であり、地下鉄東西線は御池から二条までを横断している。地下鉄丸太町線と並行する嵯峨野山陰線梅小路から二条までは、千本通に沿うものの、他路線との接続は二条駅しかない。下京は四線で四駅になっている。四線とも京都駅に乗り入れている。上京には僅か一路線一駅しかない。これは、地下鉄丸太町線の今出川と丸太町の東側に御所が大きな面積を占めているというのが主因であろう。二路線以上が乗り入れている乗り換え駅が六駅ある（京都、四条大宮と丸太町、西院、二条、丸太町御池）。これも中京に集中している。京阪電車鴨東線は川端通の地下を走っているため、洛中には算入されない。鉄道網の難点は、経営主体が異なる路線を乗り継ぐとその都度初乗り料金が加算されるため、運賃が割高になるという点である。市営地下鉄の二路線だけでは貧弱で、嵯峨野線と阪急線と京阪鴨東線によって都市交通らしい体系になっているという様子が窺える。地下鉄網だけで行き来が出来る船場とは対照的である。浄土真宗十派で京に本山を置く四派とも、下京区内にある。東西本願寺と興正寺、仏光寺である。鉾町は、丸太町一寺町一五条一新町という四本の街路に囲まれた地で、地図でも示されるように京の心臓部である。丸太町通を境として御所と接しているのが京らしい。

四年前の国勢調査による人口は、次の通りである。

市全体 1,463,723 上京区 83,832 中京区 110,488 下京区 82,784

三区で二十七万七千人ほどで、市全体の二割弱である。都市化に伴い、夜間人口が減っている状況が窺える。船場とは違い、大企業の本社が軒を連ねるという土地柄でもない。四条通と河原町通は繁華街で、飲食店や物販店が集中している。都心化が進んで、もはや暮らすには適

さない地と成り果てたであろう。気位の高い洛中人と雖も、より快適な住環境を求めるならば洛中から出るという選択肢しか残っていなかったであろうことは想像に難くない。それでも人口密度は一町歩当たり百三十七人と、密集している。百町歩では一万三千七百人であるから、全国平均二百八十人の約四十九倍である。道路と公共施設以外は町屋など民家や集合住宅であるから、当然の密集度である。

第三節 京ことば

井上章一氏『京都ざらい』という朝日新書は、八年前の新書大賞を受賞した著作で、徹頭徹尾洛中の悪口で貫かれている。氏は嵯峨の生まれ育ちである。行政区画でこそ右京区に属するが、洛外の地である。裏表紙の惹句には「ええか君、嵯峨は京都とちがうんやで・・・」とある。ここまで来ると、洛中意識は滑稽ですらある。氏には物心付いた時から、洛外人として扱われてきた屈託が身体に染みこんでいる。曰く、「嵯峨からは肥え汲みの人が来てはったなあ」(杉本秀太郎氏)、曰く「あの辺は言葉遣いがおかしかった」(国立民族博物館初代館長、梅棹忠夫氏)、^{びと}、氏はこれを称して、洛中人の「中華思想」と揶揄しておられる。正しく、その通りである。洛中人は、洛外の人を「よそさん」と呼ぶようである。今は宇治市在住である井上氏は、自らを「居留民」と称しておられる。よくせき、自虐意識が強いものと見える。「居留民」即ち「よそさん」である。曰く、洛中人は洛外の資本で出来た店を「外資系」と称する。その井上氏でさえ、嵯峨から西山を越えた亀岡を侮り「田舎者よばわりをされた私は、より田舎びた亀岡を見だし、心をおちつかせている。嵯峨は街からはずれているが、亀岡ほどじゃあない、と」。確かに亀岡は西山を越えて洛外をも外れ、丹波の国である。もはや他国であり、畿内でもない。ことほど左様に、地域性に拘る意識というのは見事に階層構造を形成しているのである。

洛中人の考え方にもう一つ、歴史に絡む事がある。それは明治二年に帝が江戸へ下ったのはちょっとした様子見で、いずれ京に戻るおつもりであったのが、何かの都合でそのままずるべったりと江戸城に居着いてしまわった。そやから、遷都の詔勅もないままや。御所は今でも京にある、^{びと}、これを根拠に、帝の代替わりの度毎に「御所に戻って来はったらええのに、^{びと}、」ということになる。井上氏は「そう言いつのる人さえ、いなくはない」と控え目である。しかしこれは案外、洛中人の本音とも言えるであろう。公家衆や出入りの商人も随行して行き、京には寂しい空気が充満した。泉文明氏『京ことばとその周辺』では「冗談まじりに」という断りがあるが、同趣旨の考え方が紹介されている。

洛中人の中華思想に最も敏感であるのは、浪速人^{びと}である。曰く「京は王城の地言うけど、青物食うて往生の地じゃ」と悪たれる。こういう心情は、京に題材を採った落とし噺に描かれている。最も顕著なのは『京の茶漬け』であろう。洛中人は、客人が帰りかけると「何もおへんけど、まあぶぶ漬けでも、^{びと}、」と言うのが口癖である。本心では茶漬けさえ出す気がないのに、お愛想でこういうことを言う。これを「ごっつお言葉」と称する。「京の茶漬け、高松のあつかんで」と並び称する。高松の「あつかんで」というのは、「まあ、よう扱わんで」の転訛と考えられている。噺『京の茶漬け』は、京に上る度に「何もおへんけど、まあぶぶ漬けでも」と言われ続けて癪に障っていた浪速人が、「一遍、ほんまにぶぶ漬けよばれたろ」と勇躍、

朝から出掛けるといふ筋立てになっている。京の出入り先に赴いて帰り際、いつものように「何にもおへんけど、まあぶぶ漬けでも、、」と言われた切っ掛けを捉えて、「ああさよか、えらいすんまへんなあ」と応じたのである。当家では残りご飯が茶漬け一杯分しかなかったので、最初のお椀を食べ終わってもお替わりを勧めることが出来ない。痺れを切らした浪速人、空になったお茶碗の底が見えるように突き出して、「もし、このお茶碗、どこでお買い求めになりました」と尋ねると、相手は「へえ、このお櫃と一緒に、そこの荒物屋で」と空になったお櫃の底を見せる、というのがサゲである。ことほど左様に、浪速人には洛中人の中華思想が鼻に付くのである。

また『愛宕山』という噺では、ミナミをしくじった（失敗した）幫間の一八と繁八という二人が祇園で働いている折、愛宕山への野駆けに同道するという筋立てになっている。ここでは一八と繁八の二人に、浪速人が洛中人をどう捉えているか代弁させるようになっている。現今のように公共交通機関が発達していても、市街から愛宕山に参詣して戻ってくるには一日がかりである。増してや往時のように全行程を徒歩でとなると、夜明けと共に立出して帰りは日が暮れ時、ともすると日がとつぷりと暮れてから帰着という遠出であったことであろう。普通にお茶屋遊びをするよりも、舞妓芸妓に仲居、お茶屋の女将まで総動員で、仕出し屋にお昼の弁当を手配するやら何やらで、何倍もの散財になったことであろう。そして線香代（お花代）は、置屋を出てから帰って来るまでという勘定なので、丸一日である。それを一八は「京の人間てなしみたれてけつかるさかいなァ、お茶屋で散財したら高つくさかい山行きしょうてな、しょうもないこと考えるのや」と悪態を吐く。浪速人と洛中人を対立させようという構図の下で、経済的合理性は犠牲になっている。そして愛宕山上で土器投げをして遊んでいる折、又しても「しょうもないあんなアホなもん、ヘッ、京の人間なんか、大体しみたれてけつかるさかいね、土器みたいなもん放って喜んでまんねん。あんなもん百枚放ってなんぼでんねやいね。大坂の人間はあんなケチなもん放りまへんわ」と難癖を付ける。旦那が「ああそう、大坂のお方は何を放りなはる」と尋ねると、「ええ、金を放りまん、ヘッ、金貨やとかね、銀貨とか、五十銭の銀貨なんかチャリン、、」と見栄を張る。業を煮やした旦那、予て用意していたのであろう小判二十枚を崖からばら撒いた。一八が崖の下まで取りに行くのであろうとの算段であった。果たして一八は、傍らの茶屋にあった傘を差して崖を跳び降りて小判を拾い集めた。勢いで崖を跳び降りたまでは良かったが、上がってくる時のことは全く念頭になかった。噺では、襦袢を解して絹糸の縄を綱い、先端に石を結びつけて崖途中の竹に結び、縄を引いて竹を撓らせておいて反動で跳び上がってくるという現実離れした展開にしている。襦袢も着ていないので裸同然の一八、「小判は」と尋ねられて「あ、下に忘れてきた」でサゲになる。

京ことばが現時点においても最も「需要が大きい」のは、花街においてであろう。国内外からの観光客はお茶屋遊びをするのが目的で京を訪れ、お座敷では京ことばを耳にして満足することであろう。今や洛中で生まれ育ち、そのまま舞妓や芸妓になる例はごく少ないであろう。つまり、洛外育ちで置屋に入って、京ことばは「第二言語」として学ぶことになるのである。着物の着付けや行儀作法を習得するのと同じように、京ことばも努力して後天的に身に付けるものである。そういう意味では、一種の廓ことばである。その特殊性が際立ちすぎると、廓外で使うのが憚られる、という社会的影響について考察する必要も生じるであろう。

大淵幸治氏『本当は怖い京ことば』という一書は、書名通りに語用論的観点から洛中人の思

考回路が如何にして言語的に具現されるかを興味深く、実例を挙げて分析しておられる。氏は越中のお生まれであるが、西陣の上七軒で「生長」と経歴紹介にあるも、何歳からであるかは記載がない。しかし生まれが洛中でないという事実によって、洛中人たり得ないという姿勢で臨み、それ故に客観的視点が貫かれている。洛中人の思考は受け身志向が基本であって、「洛外人からこう言われた場合にはこう返す」という場合が多いという。自分から意思を表示するのではなく、相手の言い分を正面から否定することなしに、相手に悟らせるように持つて行くという高等戦術なのである。そして「それが分からんようなお人は、しょうがない」と切って捨てるのである。「考えときます」という常套句が典型である。洛外人がこれを字義通りに受け取って後日、「あの件はどないになりました」とでも尋ねようものなら、「あの人は、言うてることが伝わらん人や」という評判が立って、最悪の場合付き合いもして貰えないようになる。洛中人は「お断りします」と断定するのを避けるが為に「考えときます」と取り繕うのであって、その機微を察しないことには朴念仁とされてしまうのである。帯の惹句から例を引くと、「おうち、面白い人どすな」とある。「おうち」は二人称の人称代名詞で、「お宅」に相当する。京で面と向かって「面白い」と言われるのは、「あんたの言うてることは分からん」という宣告であり、決して褒め言葉ではない。「あんたとは、よう付き合わんわ」と言われているに等しいのである。このように、「面白い」は書名通り「怖い」形容詞である。

社会言語学的に興味深いのは、性差に関する考察である。「～え」というのは「～にしないで」という命令文であるが、女性語であるとの指摘である。「あんた、大概え」というのは「大概にしておきなさい」の意であるとの説であるが、随分と簡略化されたものである。「え」という一音で強い命令を表意する助詞として成り立っているのである。語用論的には、面前の相手に対して何かを制止するという状況が必要である。文脈依存とされる日本語語用論的考察においても、これほど簡略な統語形式がこれほど複雑な背景状況を必要としている端的な例であると言える。まだ同書には、「いちびりすぎえ」という見出しも立っている。「いちびる」は巫山戯るの意で、船場ことばとしても通ずる。しかし「いちびりすぎえ」を「巫山戯すぎですよ、エエ加減にしないで」と言い換えてしまうと、京ことばとしての味わいが失われてしまう。反対に複雑な統語構造の例としては「しとうみ」、これに「やす」を加えると「しとうみやす」となる。「しとうみ」は差し詰め、「してみなさい」であろう。「これを食べてみなさい」は「これ食べとうみ」となろう。「しとうみやす」となると、「してみたらどうですか」となろうか。この辺りは性差もあるが、年代差も関わってくるであろう。現代の若年層においては、このような物言いは廃用になって久しいと断ぜざるを得ない。

依頼表現では、究極の丁寧度は「～しておくれやさしまへんやろか」というように具現されるようである（最終章）。これは多分にして想像上の言い様であり、現実には耳にすることはまず皆無であろう、という程の複雑な統語構造である。直訳すると、「していただく訳にはまいりませんか」とでもなるであろうか。統語分析すると「し（するの連用形）+て、助動詞「だ」の連用形+お、接頭辞+くれ（くれるの連用形）+やす、動詞の未然形+し、するの連用形+助動詞「ます」の連用形+否定の助動詞+助動詞「やろ」終止形+終助詞」というように、途轍もなく複雑である。これは理論上の産物であって、現実の言語生活においては、このような複雑すぎる物言いは理解の負荷が過重になるので絶対的に避けられるであろう。聴き手が解釈するには、統語的負荷が大きすぎるのである。

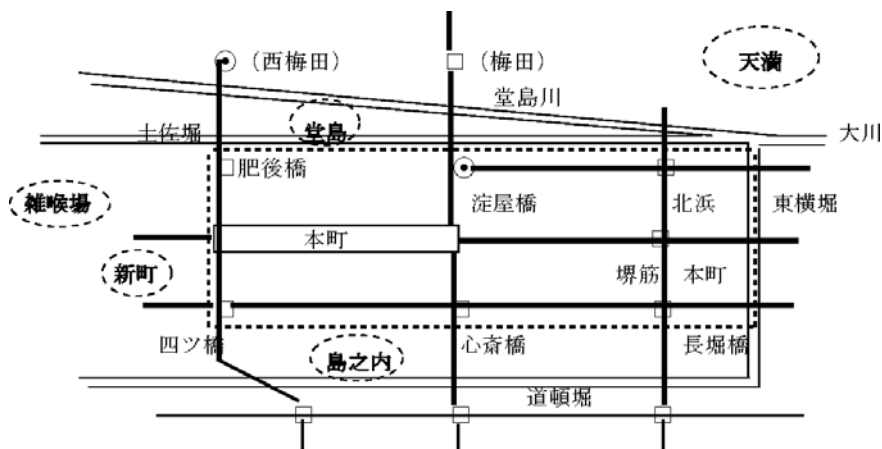
第四節 船場の地理

船場は嘗て、東西の横堀と土佐堀、長堀という四本の堀に囲まれていた。堀で囲まれているので四角に近い地形であり、東西は十町ほど、南北は二十町ばかりである。洛中に比べると、面積は十三分の一ほどにしか過ぎない。約百年前に西横堀と長堀が埋め立てられ、「地続き」になった。その頃から市内に工場が建て込んで、煤煙で空気が悪化したという事情もあって、船場に居を構えていた店主と家族は、市内なら帝塚山、市外は芦屋や伊丹というような阪神間に居を移した。土佐堀の北は堂島川と蜷川を越えるとキタ新地、長堀の南は島之内で、更に道頓堀を越えるとミナミの新地という土地柄であった。道頓堀は芝居町で、五座と呼ばれた小屋が軒を連ねていた。

西横堀や長堀が埋め立てられるまでは、浪速の街は「八百八橋」に象徴される水都であった。「江戸の八百八町、浪速の八百八橋」と並び称されたものである。往時の主要な橋名を列挙してみよう。北西の肥後橋を起点に、東→南→北廻りに「橋」を省略して並べる。肥後－淀屋－浪速－今橋－本町－農人－安堂寺－末吉－安錦－長堀－心斎橋－四ツ橋－信濃、となる。これらの橋に囲まれた「島」が船場であった。四ツ橋は長堀と西横堀が交差する地点にあって、炭屋、吉野屋、下繫、上繫という四本の橋が架けられていた。船場の南西隅であった。今の東横堀は、辛うじて川として残ってはいるものの、地図上は高速道路が上を通っているので川筋としては表示されないことが多いのは嘆かわしい。

山田庄一氏『京なにわ暮らしの歳時記』では、船場ことばとは島之内と雑喉場と堂島から天満にかけて、大店の主が話す一種の社交用語と定義されている（第四章）。地理的範囲は船場から外に大きく広がるのに対して、通用される階層を限定している点が社会言語学的には興味深い。船場で生まれ育つ店主にとっては第一言語であるが、船場以外から奉公に來た丁稚らにとっては、後天的に習得する第二言語である。

往時の船場は、今では地下鉄路線図と重ねると分かりやすい。南北に走る四つ橋線、御堂筋線、堺筋線、東西は京阪電車本線、中央線、長堀鶴見緑地線に囲まれる地で、碁盤目のように東西南北は直交する。土佐堀南岸を通る京阪電車は淀屋橋駅が終点であるが、天満橋から分岐した中之島線は堂島川南岸を通って浪花橋－大江橋－渡辺橋－中之島に到る。橋尽くしである。船場内の駅は、四つ橋線が肥後橋－本町－四ツ橋、御堂筋線が淀屋橋－本町－心斎橋、堺筋線が北浜－堺筋本町－長堀橋である。東西は、中央線の本町－堺筋本町と長堀鶴見緑地線の四ツ橋－心斎橋－長堀橋である。中央線の本町は、四つ橋線と御堂筋線を結ぶ通路としても機能している東西に長い駅である。このように旧船場の地域内には地下鉄駅で乗り換え駅を含めて延べ十四駅あり、そのうち淀屋橋と北浜は京阪電車本線も走っている。五町も歩けば、どこかの駅に辿り着く。面積が十三倍以上という洛中には、東海道線が一駅、嵯峨野線（山陰本線）は京都を除いて四駅、地下鉄烏丸線六駅と東西線六駅、四条通地下の阪急線が三駅と嵐山電鉄嵐山本線の二駅、合計で二十二駅である。単純計算では、単位面積当たりの鉄道駅の集積度は八倍以上という勘定になる。現在の船場を地理的に見るならば、地下鉄路線図で代用されることを示してみよう。想定域内を点線で囲んでみる。船場の周辺地は楕円で表示する。



〈船場地域内の地下鉄路線図〉

恐らくは地下鉄網整備の折に綿密に計画を立てていたものであろうが、市街中心部たる船場は、非常に分かりやすい条里制の如くに東西南北に路線が通っている。京阪電車本線が天満橋から都心への延伸を計画した際、梅田への乗り入れを要望したのであるが、先見の明に欠ける市交通局はこれを是としなかった。そのため、淀屋橋駅を始発とすることを余儀なくされた。現在に至るまで、筆者を含んだ京阪沿線住民は梅田に出るのに環状線か地下鉄線に乗り換えるという不便を強いられている。京阪電車は天満橋から分岐して堂島川南岸を東西に貫く中之島線を開業したが、利用者は当初の想定を下回っているようである。船場外となる東横堀の東には地下鉄谷町線が堺筋線と平行して走り、更にその東は長堀鶴見緑地線が玉造から北上して環状線と並行して京橋に至る。東海道線の尼崎と旧片町線の片町（現、大阪城北詰）や京橋を結ぶ東西線も比較的新しい路線である。路線の大半は地下を走っている。

大江橋と淀屋橋の間にある大阪市役所から南海電車の難波駅まで南北を貫く御堂筋は、南行きの一方通行ではあるが、浪速の目抜き通りである。北御堂はお西、南御堂はお東という浄土真宗の門前町であるかのような町の造りである。昭和初期に関一市長の構想によって現在の道幅に拡充整備された。西横堀や長堀が埋め立てられた時期と重なっている。この時期に街並みが大きく変貌したのである。

第五節 船場ことば

京ことばについて論じた書物は夥しい数が入る。対して船場ことばについては、ごく限られる。これは奈辺に起因するものか、という辺りから比較するのも意味があることと思われる。ここまでに京ことばについて触れてきたが、上洛する観光客にとって「観光資源」としての京ことばは魅力的である。花街を例に採るのが分かりやすいであろう。言わば、京ことばは廓ことばとしての存在価値が大きいとも考えられる。そういう観点からは、船場ことばは商人のものであり、外部との接触は商い上の関係者に限られる。京ことばが不特定多数の上洛者が触れる対象であるのに対して、船場ことばは少数特定の関係者が接触する存在であるという対

比が成り立ちそうである。前掲の井上章一氏には『大阪的』という著があって、この数十年はお笑いに特化していると一般的に受け止められている商都を広い視点から俯瞰している。洛中人の中華思想と比べるには好一対を成している。その前書きに、船場では京の呉服などを商いしていたために喋り方も洛中人と同様であった、という指摘がある。また太閤秀吉公が大坂築城によって石山合戦による荒廃を復興しようと企てた折、伏見から商人を呼び寄せたという説も称えられている。慶長の冬の陣と夏の陣を経て大坂城は落城したが、その後は天下の台所として街は栄えていった。その中心が船場であった。

まずは前掲の山田庄一氏『京なにわ暮らしの歳時記』を参照してみよう。氏は大正十四年、船場は安土町二丁目のお生まれで、生家は代々呉服屋を営んでいたが、曾祖父の七代目で廃業した。大学は京で下宿生活となった。船場と島之内は、氏の出生直後から様子が変わり始めた。店主家族は、店だけを残して居を郊外に移し始めたのである。それから約二十年後、空襲によって一帯は焼け野原と化した。戦後は復興によって高層建築が建ち並び、夜間人口は減少の一途を辿った。従って、上方噺で「動態保存」されている船場ことばや商家の有り様は、百年前までの様子と承知をしておかねばならない。商家の世襲では、性別と長幼の順が絶対的である。船場では、娘に婿を取ることが多かった。実の息子に嗣がせたは良いが、商才がなければ家業が傾く。血筋を受け継がせるためには、勘当でもせぬ限り代替えは辛い。その点、娘に婿を取るについてはじっくりと人物を見定めることができて、合理的であった。同書においては、娘の長幼を次のように列挙している。「おいとさん、中いとさん、小いとさん、豆いとさん、芥子いとさん」となると第五子までの勘定である。次に息子であるが、これは「おぼんさん、中ぼんさん、小ぼんさん、豆ぼんさん、芥子ぼんさん」であろうか。原著では中略であったので、補足した。子沢山はお家繁盛とばかりに、末子までの順番を想定した命名である。

同書第四章は「失われた船場ことば」と題して、往時の語彙や言い回しなどを収録した貴重な記録である。そこで列挙されている語彙項目を、統語範疇によって分類してみる。見出し語には丸印が附されていたが、これは略す。語義を括弧内に示すが、表記を変更した語や言い換えたものもある。

〈名詞—人物、人体、身の回り品〉 きびしょ（急須）、かっか（下駄）、おとがい（顎）、でぼちん（額）、しぶちん（しわん坊）、ねそ（目立たぬ人）、しっかい（悉皆、布の洗い張り）、おじゃみ（お手玉）、ちちりん（松毬）、かんしょやみ（潔癖症）、ねき（傍）、ちちくま（肩車）、あとじょり（後退り）、あつけ（暑気）、はばかりさん（ご苦労さん）、あんさん（対称詞）

〈名詞—食べ物〉 おむし（味噌）、おまん（饅頭）、がんじ（丸薬）、おひつ（飯櫃）、おしたぢ（醤油）、おけそく（仏前にお供えする餅）

〈名詞—動物、昆虫類〉 きんとと（金魚）、おんびき（蓼）、おんごろもち（土竜）、おねきり（おにやんま）、らっぼ（銀ヤンマの雄）、べに（同じく雌）、ぽっかぶり（台所に出没する、最も嫌われる虫類）

〈動詞、補助動詞、形容詞、副詞〉 なぜる（撫でる）、おます（あります、そうです）、ずつな

い（術ない、苦しい）、けなるい（羨ましい）、こそばい（撥ったい）、がらんど（空っぽ）、びんちょ（汚い、不潔）、とうない（とても）、えんぱんと（折悪しく）

人物に関して「ねそ」は補足が必要であろう。同書では「ねそがことする、ねそがこそする」という見出しで立項され、「目立たぬような人が大事を起こす」という語釈が付いている。『大阪ことば事典』では「ねそ」で「むっつりとしておとなしい人を嘲っている」という語釈である。「かんしょやみ」は漢字表記するとしたら「癩症病み」となるであろう。噺『百年目』でも、奉公した早々に寝小便をした丁稚に暇を出すというお家さんが「癩症病み」と謂われている例がある。

名詞では、昆虫の部類に語彙が多いのが印象的である。銀ヤンマにおいては、雌雄の区別までなされている。往時の住まいは土庭もあったので、昆虫や爬虫類も棲息する余地があったのであろう。「なぜる－なでる」はザ行とダ行の混交例である。

部分的には「でばちん、しぶちん、はばかりさん、こそばい」のように、現代の日常語彙として生き残っている場合もある。『おごろもち盗人』のように噺の外題として伝わっている語彙もある。「ちちくま」は、噺『地獄八景亡者戯』で軽業師が三人を肩車して針の山を登っていく場面で使われている。これが「動態保存」の実例である。

このように名詞で意味範疇によって分類を加えてみると、身近なものが多いという点に思い至る。

補助動詞では、「～でござります」が訛って「～でござす」になったという分析である。音韻分析をするとすれば、かなり複雑な過程になるであろう。文楽三味線の古老であった二代鶴澤清八師は更に丁寧で「ござらっしゃります」という二重敬語であったという。

次は挨拶の類である。主として奉公人が用向きに出掛ける折、「いて参じます」と店内に声をかける。筆者の語感では「行って参じます」と促音便にするよりもこの方が雅な響きがするように思われる。対して送り出す側は「お早うお帰り」と送り出す。噺『高津の富』では、淀屋橋辺りに宿を取った客が出掛ける折、「お早うお帰りやす」と送り出されている。もっと古風には、店主であれば「いといなはい」と送り出す言い方もあったであろう。「行ってきたさい」に相当する。いかにも船場らしい、商家らしい挨拶である。

年配の女子衆が「頭を下げて頼んだ」ことを「手摺り体貌で、頼んで参じました」という言い様をしたと紹介されている。字面で見ても、辞書を引かねば親しみのない字が並んでいるが、話し言葉としても難解である。『大阪ことば事典』では「手摺り」という見出し語として二通り立項してある。高低低という音形では「欄干、勾欄。縁側に足を踏みはずさぬように木や竹で低い仕切りをしたもの。橋の欄干は手すりとはいわない」という語釈である。もう一つは低低高という音形で「人形芝居の舞台で、人形遣いの腰から下を隠すための装置をいう（中略）。今日のように板を前面に横に張ったものとなっても、テスリの名だけが残し、ひいては、人形遣いの異名ともなったのである」という語釈である。中略の箇所は、人形が一人遣いであった折の記述で、今では「ツメ人形」と呼ばれている。いずれにしても後者は、人形浄瑠璃と関連が深いようである。「体貌」という語は『大阪ことば事典』に立項されていないが、『広辞苑』第六版には「①すがた。かたち。容貌。②体容を正して敬意を表すこと。礼貌」とある。前者は一般語彙としての用法であるが、後者は社会語用論的意図が加わった結果である。

次に船場ことばの実例として、三島佑一氏『船場道修町』から、大番頭が丁稚に諭している場面を再録してみる（初章、「道修町の歴史と商法」より）。

「ええか、奉公いうもんは働きながら勉強させてもろてるということやで（中略）見てみ、学校行きが中学や大学出てようよう社会に出る時分には、わてらは心掛け次第で、もう歴とした船場商人になれるやないか。立派な店持ったら、ゆくゆくは学校出を雇うこともできるんやで。それに授業料はいらん、三度三度食べさせてもらうわ、着る物もあてごうてもらうわ、おまけに月々小遣いももろうて、それで長年勤め上げたら暖簾分けや別家いうて、嫁さんや家の世話までしてもらえる。結構なことやないか（後略）」

これは百年前までの船場ことばを映していると考えて良からう。著者は道修町のお生まれであるから、生粋の船場人である。同書の見出しに、地名の民間語源として「土性骨があるから」ともあるが、根拠は示されていない。『大阪ことば事典』には「道修町やくすり屋、松屋町カシン（菓子）屋、寺町や坊ンさん」と挙げられている。

船場ことばを対象とした文献は少ないものの、上方噺に伝えられているのは「動態保存」であると筆者は考えている。船場の大店が職住一体で、店主から丁稚までもが一つ屋根の下に暮らしていたのは百年前までであるが、往時の言葉遣いは噺の中にそのまま残っているのである。人称代名詞を例に採るのが分かりやすいであろうが、「わて、あんさん、おまはん、こなた、こんた」というような物言いは二十一世紀の現代においては、船場のど真ん中と雖も耳にすることはあるまい。仮にこれを「僕、君、あなた」というように置き換えたとしたら、噺としての味わいは雲散霧消してしまう。それ故に噺の中では百年前までの言葉遣いは、そのままに後代に伝えていかねばならないのである。これを「動態保存」と称したのである。大ネタの『百年目』を題材に採る。隠れ遊びの番頭が芸者太鼓持ち一統を引き連れて花見に出かけたところ、出会い頭に当主と遭遇してしまう。番頭が「足が上がるか」と一晚煩悶した翌日、当主が番頭を呼び出して諭す場面が聴かせ所である。年齢としては、当主は還暦手前の五十代、番頭は三十代ぐらいであろうか。親子ほどの年齢差があり、当主の貫禄を演出するのが噺家として腕の見せ所である。番頭は実直なように見せかけて陰でお茶屋通いをして散財しているのが、店主は最終的にそれを許すという風格を示さねばならないのである。次は米朝師版からの引用である。

旦「こんたの骨折りで毎年大福帳が一冊ずつ汚れていく。こんたの丹精じゃ、ありがたいこっちゃと思てる。（中略）こなた、一家の主を旦那と言うのは、どういうわけか知ってなはるか。知らん。そうじゃろな。この歳になるわしが今まで知らなんだんやさかい。（中略）」

しかし昨日は、相当うろたえてたとみえて、妙な挨拶をしたなあ、おまはん。なんや、長々ご無沙汰をしとりますとか、承りますればお店もますますご繁盛とか、、、妙なことを言うてたがだいぶ酔うてたんか」

番「いいえ、もう旦那さんの顔を見た途端に酒の酔いもなんにもきれいに醒めてしまいましたが、あの時は、ああ申し上げるよりしょうがおまへなんだ」

旦「なんでやいな」

番「あんなとこ見られた上は、こらもう百年目やと思いました」

注目すべきは、主から番頭への対称詞が「こなた－こんた－おまはん」と連続的に変化している点である。「こなた」は古風で、丁寧な響きがあるが、「こんた」は二音節目の撥音化によって丁寧さが下がる。「おまはん」となると、更に尊卑度が低下している。番頭が初めて奉公に上がった頃というのであるから、数十年前の懐古談やら、「旦那」の民間語源を織り込んだりして、当主が一人で長々と喋っている。梵語の「だんな」は布施の意であり、ここでの語源説は民間語源で、この噺専用に拵えたものかもしれない。梅檀の木というのは実在する香木であるが、難蕤草という草はない。当て字である。この場面では語源の正確さは二の次で、当主－番頭－店の者という立場でお互いを支え合うという教訓を垂れるのが目的なのである。番頭としては、直に当主と話をするまで、足が上がるのかお許しが出るのか、測りかねていた。前夜はそれを考え抜いて、悩みに悩んでいたのである。しかし当主が話し始めてみると、どうやらお咎めはないようである。番頭は緊張しながらも、黙って話を聴いていたことであろう。これに先だって、丁稚に言いつけて番頭を呼びにやらせる場面で、「米の飯がてっぺんへのぼったとは、貴様のことじゃ」ときつい叱りようで、最も野卑度が高い対称詞として「貴様」になっている。これは意識して番頭の耳に入るように計算した物言いであろう。

第六節 結 び

本稿は、京ことばと船場ことばを対比して、主として社会言語学的見地からその特性を浮かび上がらせようと試みてきた。構成として、両地域においてももの言い様がどのように異なっているかという側面を重視して分析を進めてきた。しかしながら方言学的には、両方を纏めて「京阪方言」というように括るのが一般的である。それは一つに、音韻面や語彙面で両地域の差が小さいので、それに目を瞑って一括りとすることが可能であるという事情に拠る。いま一つは、畿内においても文化的かつ地理的に中心に位置しており、周辺部と区別されるべき必然性があったと言えるであろう。ここで「京阪方言」と括っているのは、主として高低による語強勢の区別による。京阪式では「橋」は高低、「箸」は低高、「端」は高高である。一音節語は母音が長化されて一拍半となり、「火」は低高、「日」は高低である（いずれも『関西弁事典』による）。これらは近畿方言全般に認められる音韻の特徴である。筆者は播州方言の地に生まれ育ち、京阪方言とは異なる点を自覚する経験があった。「猫」は低高であり、「電池、電車、地図」は全て頭高であった。特に後者は播州方言全般と言えるや否やは確言できず、個人的な発音である可能性も考えられる。また敬語は京阪式のハルではなく、テ敬語であった。「～シテハル」は「～シトッテヤ」であった。これらは方言区画として顕著な差であると言える。摂津国は今では府県境によって東西に隔てられているが、東摂津－西摂津－播磨というように並べてみると、連続体を形成している様子を実感することができる。

語用論的にも、両地域には共通した意識があると言える。主として商家で、発注をしたり頼み事をするような場合、「これは、急いで急かんようなこっちゃけど、、、」と前置きをするところがある。実質的には「できれば急いでほしい」というのが本心なのであるが、それを遠回し

に言語化しているのである。表面上は相手に気遣いをしているという態を見せて、話し手の言い分もちゃんと盛り込んでいる辺り、高度な言語文化であると言えよう。気心の知れた相手に限られるとしても、あからさまな物言いよりも含蓄があって、なおかつ本心も伝わるようにと洗練されてきた文化である。頼まれた方も、できる限りで相手の要望に応えようと心掛けるであろう。阿吽の呼吸である。

しかし地域的特性によって、自ずから異なる傾向も窺える。船場は江戸開府以来、天下の台所として日本経済の中心であった。六十余州を相手にして大きな商いを張ってきたのである。それに対して京は、王城の地であるが故に一千年来変わらないながら、小さな商いに特化して生き残ってきたという側面が強いであろう。そういう観点から、船場は商いを優先するという点で余りにも迂遠な物言いをする誤解を招きかねないという思考が働いて当然であると考えられる。

再度、地理的見地から総括をしておこう。冒頭の地図でも示したように、近畿方言は三重の同心円で捉えると理解が早い。中心部を占めるのは畿内五箇国であるが、その中でも洛中と船場は地理的にも文化的にも核である。両地は直線距離で約十一里、そのうち六里ほどは淀川が直線で結んでいる。淀川右岸は北摂の地で、左岸は河内国である。河内国は北で山城と接し、南は紀伊国と接している。そのためか南河内は、言葉遣いが荒いという印象を受けるが、それは今東光師の文学作品などによって後付けされたものかもしれない。言語学的な検証が必要であろう。播州弁にしても紀州弁にしても、周縁になるほど雅さから遠い言葉遣いになるというのは何故か必然性が潜んでいるように思われる。都から遠ざかるに連れて、鄙の様相を呈してくる。但馬、丹後となると、もはや近畿方言の圏外となってしまう。言語圏の中心部が標準的で規範となっており、周縁部へと外れるに連れて標準的でなくなる傾向というのは日本語のみならず、世界中の言語で普遍的に観察される原理であろう。

最後に、「部外者」が用いたがる誤用について指摘しておく。これは洛外人と言うよりも、近畿圏外でも知ったかぶりで多用されている「まったり」についてである。「まったり」は味付けについての形容詞であり、塩辛くはないが濃厚な味を形容している。それを部外者は「ゆったり」との音声的類似性からか、「まったりと時間を過ごす」というように誤用する。「まったり」という語感がいかにも京ことばらしい雅な響きであるためか、正確な意味合いも知らずに真似をしたくなるものらしい。言語流通というのは正用か誤用かであるよりも、広く流布されて一般化するに連れて定着してしまうものである。常に辞書を座右において言葉の正用を心掛けていきたいものである。

参考文献

- 泉文明（2012）『京ことばとその周辺』京都：晃洋書房。
稲垣史生（2007）『三田村鳶魚 江戸生活事典』（新装版）東京：青蛙房。
井上章一（2015）『京都ざらい』東京：朝日新聞出版。
井上章一（2018）『大阪的』東京：幻冬舎。
大淵幸治（2022）『本当は怖い京ことば』名古屋：リベラル社。
桂米朝（1985）『続・上方落語ノート』東京：青蛙房。
桂米朝（1991）『三集・上方落語ノート』東京：青蛙房。
桂米朝（2013、2014）『米朝落語全集』全八巻 増補改訂版。大阪：創元社。

- 角岡賢一（2019）「日本語尊大表現の語用論的分析」『龍谷大学グローバル教育推進センター研究年報』第28巻。pp.3-22。
- 角岡賢一（2020）「待遇表現としての尊大語と卑罵語」米倉、他（編）『ことばから心へー認知の深淵ー』東京：開拓社所収。
- 角岡賢一（2021）『上方落語にみられる待遇表現』東京：くろしお出版。
- 菊地康人（1997）『敬語』東京：講談社。
- 真田信治（監修、2018）『関西弁事典』東京：ひつじ書房。
- 釈徹宗（2010）『おてらくご 落語の中の浄土真宗』京都：本願寺出版社。
- 陣内秀信（2023）「都市空間のなかの長屋」田中優子（編）『落語がつくる〈江戸東京〉』東京：岩波書店所収。
- 関山和夫（1992）『落語名人伝』東京：白水社。
- 高島幸次（2018）『上方落語史観』大阪：140B。
- 田中優子（編著、2023）『落語がつくる〈江戸 東京〉』東京：岩波書店。
- 田中優子（2023）「『長屋』という思想」上掲書所収。
- 秦恒平（2012）『京のわる口』東京：平凡社。
- 前川佳子（2016）『船場大阪を語りつぐ』大阪：和泉書院。
- 前田勇（1966）『上方落語の歴史』改訂増補版。大阪：杉本書店。
- 牧村史陽（1984）『大阪ことば事典』東京：講談社。
- 松田敬之（2019）『次男坊たちの江戸時代 公家社会の〈厄介者〉』東京：吉川弘文館。
- 三島佑一（2016）『船場道修町 薬・商い・学びの町』大阪：和泉書院。
- 宮本又郎（2012）『改訂新版 日本経済史』東京：放送大学教育振興会。
- 山田庄一（2021）『京なにわ 暮らしの歳時記』東京：岩波書店。
- 山本有造（1994）『両から円へー幕末・明治前期貨幣問題研究』京都：ミネルヴァ書房。